

経営者および経営者候補者に読んでほしい書籍

2020年3月30日 湯浅伸一

NO	書名・著者・出版年・出版社	概要
1	<p>「マネー・ボール」 マイケル・ルイス著、中山宥訳、2003年、ランダムハウス講談社（現在はハヤカワ・ノンフィクション文庫）</p>	<p>貧乏球団オークランド・アスレチックスのGM ビリー・ビーンが、統計データ駆使して（今でいうサイバーメトリクス、打率よりも出塁率重視など）、チームを金満球団と互角に渡り合う強豪へと変えていく。常識を疑うことの重要性、データの面白さがよく分かる。</p>
2	<p>「エスキモーに氷を売る」 ジョン・スポールストラ著、中道暁子訳、2000年、きこ書房</p>	<p>マーケティングの鉄板本なので今さらですが、NBA ファンとして。これまた弱小不人気 NBA チーム、ニュージャージー・ネットスのGMに就任した著者が、チケット収入を上げるために奮闘し、組織が変わっていく様子が描かれている。ちなみに著者の息子のエリックは現在、マイアミ・ヒートのヘッドコーチ。</p>
3	<p>「新・観光立国論」 デービッド・アトキンソン著、2015年、東洋経済新報社、</p>	<p>人口減に悩み、かつ移民政策のハードルが高い日本にとって最善の策は外国人観光客という「短期移民」にお金を落としてもらうこと。上質のサービスに大きなお金を使う欧米人にも満足してもらえるハード、ソフトを充実させようというお話。観光産業だけでなく、輸出産業にも参考になるのではないかな。</p>
4	<p>「おどろきの中国」 橋爪大三郎、大澤真幸、宮台真司著、2013年、講談社現代新書</p>	<p>橋爪・大澤コンビは、他にも仏教、イスラム教、アメリカ、日本などに関しても同じような著書がある。対話形式なので入門書として手軽で、読みやすい。手軽すぎて正確性などに難があるかもしれないが、「一中国」は数千年にわたって西洋と違う価値観で存在してきたこの国を理解する難しさ、「一キリスト教」はユダヤ教まで遡って勉強しなければ一神教が理解できないことが分かる。外国と付き合うためには、ベースの教養としてその国の地政学や歴史、宗教を知っておく必要がある。</p>
5	<p>「ふしぎなキリスト教」 橋爪大三郎、大澤真幸著、2011年、講談社現代新書</p>	<p>不良債権処理に追われていた時代に作られた「金融審査マニュアル」が20年間そのまま運用され続けた後に就任した、森信親金融庁長官（当時）の金融機関大改革を描いてきたシリーズの第3弾。サブタイトルに深い意味はなく、共同通信記者である著者が、全国で頑張っている地方金融マンやベンチャー企業を取材したもの。中小企業の経営者にはぜひ読んでもらいたい。</p>
6	<p>「捨てられる銀行3 未来の金融 『計測できない世界』を読む」 橋本卓典著、2019年、講談社現代新書</p>	<p>難しそうな統計学についてわかりやすく解説してある。統計学は、誤差と因果関係がそのキモであり、ロナルド・フィッシャーという現代統計学の父が考えた「ランダム化」によって科学になった。ビッグデータ騒ぎに冷水を浴びせ、サンプリング調査でもほとんど誤差がないことを説く。後半になると専門用語がたくさん出てきて難しい。</p>
7	<p>「統計学が最強の学問である」 西内啓著、2013年、ダイヤモンド社</p>	<p>「父が娘に語る経済の話」でも著者が参考書としてあげていた本。なぜ、ヨーロッパの白人が多く先住民を抹殺し、世界を征服できたのか。直接的には銃と病原菌と鉄なのだが、そもそもなぜ彼らはそれらを手にすることができたのか…。その理由をあらゆる学問を駆使して推理小説のように紐解いていく。グローバルゼーションは、今に始まったことではなく、人類が誕生してからずっと続いている。</p>
8	<p>「銃・病原菌・鉄」 ジャレド・ダイヤモンド著、倉骨彰訳、2012年、草思社文庫</p>	<p>「父が娘に語る経済の話」でも著者が参考書としてあげていた本。なぜ、ヨーロッパの白人が多く先住民を抹殺し、世界を征服できたのか。直接的には銃と病原菌と鉄なのだが、そもそもなぜ彼らはそれらを手にすることができたのか…。その理由をあらゆる学問を駆使して推理小説のように紐解いていく。グローバルゼーションは、今に始まったことではなく、人類が誕生してからずっと続いている。</p>